

【 1】 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗りの剝げた、①大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉鳥帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない。

なぜかという、この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいう a 災いが続いて起こった。そこで洛中のさびれ方はひとおりではない。②旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹が付いたり、金銀の箱が付いたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである。洛中がその b シマツであるから、羅生門の修理などは、もとより誰も捨てて c 顧みる者がなかった。するとその荒れ果てたのをよいことにして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいには、引き取り手のない死人を、この門へ持って来て、捨てて行くという習慣さえできた。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪がって、この門の近所へは足踏みをしないうことになってしまったのである。

その代わりまた鴉がどこからか、たくさん集まって来た。昼間見ると、その鴉が、何羽となく輪を描いて、高い鴟尾の周りを鳴きながら、飛び回っている。③殊に門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたように、はつきり見えた。鴉は、もちろん、門の上にある死人の肉を、啄みに来るのである。——もつとも今日は、刻限が遅いせいか、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草の生えた石段の上に、鴉の糞が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬にできた、大きなきびを気にしながら、④ぼんやり、雨の降るのを眺めていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた。」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。前にも書いたように、⑤当時京都の町はひとおりならず衰微していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな d ヨハにほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた。」と言うよりも「雨に降り込められた下人が、行き所がなくて、(A) に暮れていた。」と言う方が、適当である。その上、今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人の Sentimentalism に影響した。申の刻下がりから降り出した雨は、いまだに上がる気色がない。そこで、下人は、何をおいても差し当たり明日の暮らしをどうにかしようとして——いわばどうにもならないことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路に降る雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

問 1 二重傍線部 a ～ d のカタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで記せ。

問 2 傍線部①の表現効果として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 晩夏の季節感を強調している。 イ 無人で静寂であることを強調している。
ウ 闇の恐ろしさを強調している。 エ 雨が降り続く憂鬱さを強調している。

問 3 傍線部②は、ここでは古典作品の何をさすか。次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 「源氏物語」 イ 「今昔物語集」 ウ 「方丈記」 エ 「平家物語」 オ 「徒然草」

問 4 傍線部③の表現についてまとめた次の文の () 1 ～ 3 に入る最も適当な語句を、後のア～オからそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- 夕焼けの (1) と鴉の (2) の色彩の対比による美的効果とともに、 (3) 雰囲気的印象づけている。
ア 白 イ 黒 ウ 赤 エ 清新な オ 不気味な

問 5 傍線部④に「ぼんやり」とあるが、このときの下人の心境として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 奉公先から解雇を言い渡されたので、これからどうやって生きていけばよいのかわからなくなっている。
イ 天災続きの都にいても生活の目途が立たないので、どこか別の土地に行って生活を立て直そうと思っている。
ウ 夕方から降り出した雨がなかなかやみそうにないので、早く家に帰りたいといらしている。
エ いつもなら何羽も集まっている鴉が今日は一羽もいないので、どうしたのだろうかと不審に思っている。

問 6 傍線部⑤の原因となったのは、どのようなことか。簡潔に説明せよ。

問 7 空欄 A に入る最も適当な語句を漢字二字で記せ。

問 8 次に挙げる作品の中から、芥川龍之介のものを三つ選び、記号で答えよ。

- ア 「伊豆の踊子」 イ 「よだかの星」 ウ 「河童」 エ 「地獄変」 オ 「ころも」
カ 「山椒大夫」 キ 「友情」 ク 「小僧の神様」 ケ 「鼻」 コ 「山椒魚」

【 1】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗りの剝けた、大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかに、雨やみをする①市女笠や採烏帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない。

なぜかという、この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいう災いが続いて起こった。そこで洛中のさびれ方はひととおりではない。②旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹が付いたり、金銀の箔が付いたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである。洛中がそのaシ末であるから、羅生門の修理などは、もとより誰も捨てて顧みる者がなかった。するとその荒果てたのをよいことにして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいには、引き取り手のない死人を、この門へ持って来て、捨てて行くという習慣さえできた。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪がって、この門の近所へは足踏みをしないことになってしまったのである。

その代わりまた鴉がどこからか、たくさん集まって来た。昼間見ると、その鴉が、何羽となく輪を描いて、高い鷗尾の周りを鳴きながら、飛び回っている。殊に門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたように、はつきり見えた。鴉は、もちろん、門の上にある死人の肉を、啄みに来るのである。——もつとも今日は、刻限が遅いせい、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草の生えた石段の上に、鴉の糞が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、③右の頬にできた、大きなきびを気にしながら、ぼんやり、雨の降るのを眺めていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた。」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、I四、五日前に暇を出された。II前にも書いたように、当時京都の町はひととおりならず衰微していた。今この下人が、III永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた。」と言うよりも「雨に降り込められた下人が、行き所がなくて、途方に暮れていた。」と言う方が、適当である。その上、IV今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人の Sentimentalism に影響した。V申の刻下がりから降り出した雨は、いまだに上がるb気シキがない。そこで、下人は、何をしても差し当たり明日の暮らしをどうにかしようとして——いわばどうにもならないことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路に降る雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあつという音を集めてくる。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めに突き出した葺の先に、重たく薄暗い雲を支えている。

④どうにもならないことを、どうにかするためには、手段を選んでいるいとまはない。選んでいけば、築土の下か、道端の土の上で、飢え死にするばかりである。⑤そうして、この門の上へ持って来て、犬のように捨てられてしまえばいい。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊したあげくに、やっとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないということ肯定しながらも、この「すれば」の片をつけるために、当然、その後に来たるべき「盗人になるよりほかに仕方がない。」ということ、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人は、大きくさめをして、それから、c大キそうに立ち上がった。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇とともに遠慮なく、吹き抜ける。丹塗りの柱にとまっていた蟋蟀も、もうどこかへ行ってしまった。

下人は、首を縮めながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして、門の周りを見回した。雨風の憂えのない、人目にかかる懼れの無い、一晩楽に寝られそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思っただけである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗ったはしが目についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないように気をつけながら、藁草履をはいた足を、そのはしごの一番下の段へ踏みかけた。

問1 二重傍線部a、cのカタカナの部分と同じ漢字で書かれるものを、各群のa、cからそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- a ア 交換留学にシ願する。 イ 大名にシ官する。 ウ 有シで寄付をする。
- エ 文具をシ給する。 オ 年シの挨拶に伺う。
- b ア 道路標シキを見る。 イ 植物のシキ素が薄い。 ウ シキ典に参列する。
- エ 座シキにあがる。 オ 研究チームを組シキする。
- c ア 模ギ試験を受ける。 イ ギ案を提出する。 ウ 札ギを守る。
- エ ギ巧をこらす。 オ 書類をギ造する。

問2 傍線部①と同じ表現技法を用いた文を、次のア、cから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 人生の黄昏を迎える。 イ 花のような笑顔を見せた。 ウ あのダークスーツが責任者だ。
- エ 大自然の懐に帰る。 オ 棚からぼたもちそのものだ。

問3 傍線部②の「旧記」は、作者芥川がこの作品の典拠にした古典だが、その作品名を記せ。

問4 傍線部③の表現から、下人はどのような年ごろの男だとわかるか、答えよ。

問5 傍線部④のような状況に下人が陥った直接の原因は何か。本文中の表現を用いて三〇字以内で書け。(句読点を含む)

問6 傍線部⑤は「作者」と名乗るこの物語の語り手が、下人の思考をそのまま伝えているところの一部であり、羅生門がどのような状況で

あるかを下人が認識していることを示している。このように羅生門の状況について下人が認識していることを示す他の部分を、一文で抜き出し、その最初の五字を書け。

問7 傍線部Ⅰ～Ⅴの時に関する語句のうち、物語の中の世界の時間帯とは異なるものはどれか。一つ選び記号で答えよ。

問8 本文の特徴として適当でないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 比喩や象徴を効果的に用いることで、情景や状況を的確に描写している。
- イ 色彩感覚に優れた表現が多く用いられており、視覚的な文章である。
- ウ 作者による論理的な分析が、古典をふまえた話に近代的な意味を与えている。
- エ 主人公の独白によってその心理が詳細に語られ、読者を引き込んでいく。

内山節『自由論』より

■次の文章を読み、問いに答えなさい。(東北学院大学、二〇一四、改)

自然は歴史の進歩も発達ものぞんではない。あるとき、ふと、このあたり前のことに気づいた。自然の求めている自由とは、自在に生きることであつて、永遠に変わらない世界のなかで、昔と同じように自在に存在し続けることにはずである。ところが、もしそうだとするなら、自然と人間との共生には、大きな困難がよこたわっていることになる。進歩も発達ものぞまず、永遠の世界が持続しつづけることを理想とする自然と、すべてを変えようとする人間とが、同じ時空を共有することなどできるのであるか。人間は進歩や発達の道が閉ざされていることを感じ、自然は変化によって自分たちの生存 a キパンが変えられていくことを、不自由だと感じるのである。もしも b タイコの世界が回帰したとしたら、それは自然にとっては自由の X であり、人間にとっては、少なくとも現代人にとっては、自由の Y であらう。

とするとこの自然と人間の違いは、どこから生じたのであろうか。私にはそれは、①イデオロギーに支えられながら生きる人間と、イデオロギーの支えを必要としない自然との相違であるように思われる。よく考えてみれば、進歩や発達が人間にとって幸福なことなのか、不幸なことなのかは誰にもわからない。それは自動車や電機製品のない時代に暮らしていた人々が、②自分は不幸だと思っていたわけではないのと同じことである。しかし人間たちは、進歩や発達を人間社会にとって c フカケツの要素だと考えるイデオロギーをもつことによって、自らの行動を支えながら生きていく。

③自由もまた同じ性格をもっている。なぜなら人間は、自由をも一度理念化し、その理念をイデオロギー的な支えとして、自由を語る習慣をもっているからである。自然はそんなめんどうなことはしない。自在に生きていられることが、自然にとつての自由である。それは、ときに水辺に降り立ち、ときに大空を舞い、ときに森や草原に木の実、草の実を探しながら、自らの d ソンゲンに満ちた一生を送ることが、鳥たちの自由であるように。

イデオロギーに支えられるようになった人間は、その理念を実現していく変化をのぞむ。そしてそのこと自体が、自然が自在に、のびやかに生きていくためには e 妨げになってきた。あるいはつぎのように述べればよいのかもしれない。自然は自分がのびやかに生きていくことが、自然の創造なのであり、動物や鳥や虫たちが自由に生きていくこと自体が、自然そのものであるようにである。自己の存在が自由であり、自分がさまざまな自然と自由な関係をもつことができること、それが自由な自然の姿である。

ところが④人間は、自然とは何かということさえ知性とおしてとらえ、理念化し、自然保護というイデオロギーをつくりだすことによつてしか、自然とつきあうこともできない。人間にとつては自然もまた知性によつてとらえられたもの、知性によつてとらえられた他者である。

近代社会の形成以降は、人々はこの自然と人間の関係を、人間が自然を征服することをめざして行動してきた。それが近代人の理念であり、イデオロギーであった。ところが今日では多くの人々が、自然を征服しようとした人間たちの f 傲慢さを批判し、自然と人間の共生を願うようになった。私もこの変化をよいことだつたと思つている。しかしそれでもなお、理念やイデオロギーの助けを借りながら、理念を実現する変化をとおしてしか自然の問題を語れない私たちは、自然の一員ではないという気持ちは残るのである。自分が自由に生きることが自然の想像だとはいえないのだから。それは人間の自由が、自然のように生命の g ハツゲンとともにあるものではなくて、理念化された自由だからである。とすると、⑤この点でも自然と人間の共生は容易ではない、ということになる。少なくともこの困難さを忘れてしまつたら、⑥自然と人間の間によこたわるもつとも重要なことを、私たちは忘却したことになる。

問1 傍線部 a、s、j の片仮名は漢字に改め、漢字はその読みを平仮名で書きなさい。

問2 空欄 X、Y に入る言葉として最も適切なものを、それぞれ選びなさい。

- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| ア 発見 | イ 勝利 | ウ 創造 | エ 喪失 | オ 侵害 | カ 報復 |
| キ 回復 | ク 征服 | ケ 復讐 | コ 敗北 | | |

問3 傍線部①「イデオロギーに支えられながら生きる」とは、人間のどのような生き方を意味するか。最も適切なものを選びなさい。

- ア 状況を顧みず、まんじを自身の先入観でとらえてしまいがちなこと。
 イ 理想を実現するためなら、いかなる方便もためらわずに用いること。
 ウ 現実よりも理想を重視し、好悪や損得は度外視してしまうこと。
 エ 主義主張にこだわって、それを基準にして物事を判断評価すること。
 オ 自分を見失って、しばしば現実離れた妄想にとらわれてしまうこと。

問4 傍線部②「自分は不幸だと思つていたわけではない」とあるが、そういう理由を四五字以内で答えなさい。

問5 傍線部③「自由もまた同じ性格をもっている」とあるが、何と「同じ性格をもっている」というのか。適当なものを二つ選びなさい。

- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| ア 自然 | イ 進歩 | ウ 人間 | エ 幸福 | オ 時代 | カ 発達 |
|------|------|------|------|------|------|

羅生門 ①

名前

年

組

番

/ 50

一次の傍線部分の読みをひらがなで記せ。

(1点×10)

- ① 丹塗りの柱。〔 〕
- ② 大地震が発生する。〔 〕
- ③ 飢饉で死んだ人々。〔 〕
- ④ 勉強の習慣をつける。〔 〕
- ⑤ 国の経済力が衰微する。〔 〕
- ⑥ 雨が上がる気色がない。〔 〕
- ⑦ 局所麻酔を行う。〔 〕
- ⑧ 困難な状況に逢着する。〔 〕
- ⑨ 食べ物の腐爛した匂い。〔 〕
- ⑩ 犬は嗅覚が鋭い。〔 〕

四次の語句の意味を後のア～コから選び、

記号で答えよ。

(2点×9)

- ① 暇を出す 〔 〕
- ② 途方にくれる 〔 〕
- ③ とりとめもない 〔 〕
- ④ 片をつける 〔 〕
- ⑤ 息を殺す 〔 〕
- ⑥ たかをくくる 〔 〕
- ⑦ おぼろげ 〔 〕
- ⑧ 暫時 〔 〕
- ⑨ 語弊がある 〔 〕

二次の傍線部分のカタカナを漢字に直せ。

(1点×10)

- ① 屋根をシュウリする。〔 〕
- ② 日が暮れるコクゲン。〔 〕
- ③ カクベツの取り扱ひ。〔 〕
- ④ 台風のヨハで風が強い。〔 〕
- ⑤ 空モヨウをうかがう。〔 〕
- ⑥ タイギそうに振り向く。〔 〕
- ⑦ 備えあればウレいなし。〔 〕
- ⑧ ムゾウサに置かれた彫像。〔 〕
- ⑨ 日光が当たるハンイ。〔 〕
- ⑩ キョウフ心をあおる。〔 〕

- | | | | |
|---|---------|---|-------|
| ア | まとまりがない | イ | 困りはてる |
| ウ | 少しの間 | エ | 見くびる |
| オ | 誤解を招く | カ | 始末をする |
| キ | はっきりしない | ク | やめさせる |
| ケ | じつとしてい | コ | 次第に |

三次の傍線部分の読みをひらがなで記せ。

(2点×6)

- ① 政治家の回顧録を読む。〔 〕
- ② 昔を顧みて感慨にふける。〔 〕
- ③ 遠慮がちに話す。〔 〕
- ④ 相手の立場を慮る。〔 〕
- ⑤ ガスの臭気に鼻をおおう。〔 〕
- ⑥ 魚臭い匂いがする。〔 〕